

「土佐藩政録」の原本について

石
尾
芳
久

「伯爵佐々木藏書印」という印をおした「土佐藩政録」の写本が、現在私の手元にある。京都思文閣より入手したものである。いうまでもなく、元佐々木伯爵——佐々木高行が所藏していた写本であり、幕末維新において土佐藩の中樞にあり、後に明治天皇の側近であつた人物が所藏していたという意味でも貴重な写本である。しかも、この写本は、系譜的に尊重し得る写本というにとどまらない。本写本には、多くの「取消シ」と取消した文の変更が認められ、しかも、その変更は、重要な意味を有する変更であつて、単なる訂正といったことに尽きるものではない。取消し変更したものが「土佐藩政録」の正本として維新政府に提出されたのである。現在公刊されている「土佐藩政録」がそれである。それ故、元佐々木伯爵所藏本「土佐藩政録」は、単なる「土佐藩政録」の一写本ではない。「土佐藩政録」の原本と認定すべきものである。

次に原本を変更した重要部分を正本と対比して示す。

「土佐藩政録」一

佐々木本

曩者宮内省ノ命アリ嘉永癸丑ヨリ明治辛未ニ至ル年間土佐藩政ノ事跡ヲ録上セシム凡是年間ハ初豊信国政ヲ執リ久シカラスシテ幕府ノ忌諱ニ触レテ隠居ス豊範嗣テ立ツ而テ豊信後 朝議ニ参シ又国政ヲ与聞ス都テ具事皆父子ノ間ニ渉ル由テ始終ヲ豊信ニ係テ以テ豊範ノ事跡モ自ラ明瞭ナリ故先ツ端ヲ豊信ノ出処ニ起ス

公刊本

曩ニ宮内省ノ命アリテ嘉永癸丑以來王事ニ執掌セシ顛末ヲ録上セシム此顛末ヲ詳ニセントスルトキハ勢ヒ藩政ヲ詳ニセサルヘカラス故ニ此書ニ題シテ藩政録ト曰フ此時ノ藩政ハ藩主豊範父子ノ間ニ成レル者ナリ蓋豊信国政ヲ執リ久シカラスシテ幕府ノ忌諱ニ触レテ隱居シ豊範嗣テ立ツ而シテ豊信後 朝議及幕政ニ参シ又国政ヲ与リ聞ク是ヲ以テ父子ノ事跡混淆ヲ免カレス因テ各其名ヲ記シテ之ヲ別ツ

佐々木本

〔嘉永六年九月〕

是ヨリ前僅々一兩日江戸ノ報ヲ伝ヘテ藤井伊三郎土佐ニ帰ル依テ是改革時機ニ適合スルヲ知ルヘント云

是時海防軍備ヲ修メ郡府ヲ置ク 安芸ハ田野村ニ香美ハ赤岡村ニ土佐長岡吾川ハ高知ニ高岡ハ須崎ニ幡多ハ從來ノ通リ中村ニ在リ 又航海術ヲ講セシム豊信藩政ノ沿革ニ依リ海南政典

ヲ修シ繼テ藩志列伝ヲ撰セシメントシ吉田元吉等ニ命シテ担当セシム万延元年ニ至テ粗整頓ス書ノ体裁ハ其処ニ尽ス

ヘシ

公刊本

是時海防軍備ヲ修メ之カ為メ郡府ヲ置ク 安芸ハ田野村ニ香美ハ赤岡村ニ土佐長岡吾川ハ高知ニ高岡ハ須崎ニ幡多ハ從來ノ通リ中村ニ在リ

〔安政四年十月七日〕

佐々木本

十月七日松平越前守ヲ訪フ蓋時事ニ就テ詢ル所アリ

案是等ノ事以後尽ク録セス豊信外諸侯ニシテ將軍儲嗣ノ事ニ連累ス其本蓋之ニ基ス故ニ之カ張本ト為ス之ヲ録シテ始メヲ示ス

公刊本

十月七日松平越前守ヲ訪フ後又數ハ往来ス悉ク録セス

〔安政五年正月十七日〕

佐々木本

同十七日吉田元吉ヲ以テ仕置役ト為ス

案吉田元吉人トナリ硬直ニシテ史学ニ通シ殊ニ政事ノ才ニ富ムヲ以テ豊信ノ親任スル所ト為ル先年職ヲ奉シテ江戸邸ニ在リ豊信讜集ノ時來賓酔ヲ帶テ元吉ニ無礼ヲ加フ元吉屈辱ヲ受クルニ忍ヒス之ニ報復ス因テ其事ニ座セラレテ城下ヲ退去セシメテ長浜村ニ住ス豊信大ニ用ント欲ス故ニ是挙アリ蓋小南五郎右衛門ノ使命ハ是事ニ由ナリ

公刊本

同十七日吉田元吉ヲ仕置役ト為ス是ヨリ先キ吉田元吉才学ヲ以テ豊信ノ信任スル所ト為ル数年前職ヲ奉シテ江戸邸ニ

「土佐藩政録」の原本について

在リ豊信讎集ノ時来賓醉ニ乗シテ元吉ヲ辱シム元吉辱ヲ受クルニ忍ヒス之ニ報復ス豊信元吉ヲ叱シテ席ヲ退カシム因テ事無キコトヲ得タリ元吉此事ニ坐セラレテ格禄ヲ褫ハレ城下ヲ退去シテ長浜村ニ住ス豊信再ヒ之ヲ用ント欲ス故ニ此事アリ

〔安政六年二月廿六日〕

佐々木本

二月廿六日豊信致仕ス翌日容堂ト称ス豊信夙ニ 皇室ノ衰頹ヲ憂ヒ翼賛シテ興起セシメン莫ヲ図ル屢幕府ニ建議ス又將軍嗣子ノ事ニ関ス將軍紀州ノ同族ヲ養ヒ繼テ將軍薨スルニ至テ尾水越三侯譴責ヲ受リ依テ閣老ノ内論ヲ伝ヘテ隱居セシム後又謹慎ヲ命ス

案豊信松平越前守同意シ將軍嗣子ノ事ヲ周旋シ三条実万ト往復ス遂ニ成ラス仍テ爰ニ至ルト云

公刊本

二月二十六日豊信致仕ス名ヲ更メテ容堂ト称ス豊信夙ニ 皇室ノ衰頹ヲ憂ヒ大ニ翼賛センコトヲ図ル又時事ニ付キ屢建議シテ幕府ノ忌諱ニ触ル且將軍嗣子ノ事ニ関シ一橋卿ヲ立ンコトヲ謀ル將軍遂ニ紀州徳川氏ヲ養フテ嗣トス將軍薨スルニ至テ尾水越三侯譴責ヲ受ク豊信モ亦罪ヲ獲テ鮫洲邸ニ隱居ス

〔参考 公刊本五月十七日〕

此ヨリ先キ豊信深ク国事ヲ憂ヘ 朝廷ニ密奏セントスル所アルヲ以テ納戸役大脇興之進ヲシテ武家伝奏三条実万ニ其

意ヲ伝ヘシム実万ハ豊信ノ夫人ノ父母其ノ妹夫タルノ關係アルヲ以ナリ興之進発スルニ臨ミ豊信手ツカラ画師荒木寛畝カ画ク所ノ蘭相如完璧ノ図ヲ興ヘテ以テ之ヲ激励ス興之進是ニ於テ竊ニ藩邸ヲ出テ姓名ヲ変シテ大橋渡之進ト称シ陽テ脱藩ノ士トナリ木曾路ヲ經テ京師ニ達ス時ニ幕府ノ偵察甚嚴ニシテ容易ニ通過スルコトヲ得ス遂ニ三条家ノ邸内ニ入り其家臣富田織部ニ由リ実万ニ謁シ豊信ノ内意ヲ口陳スルコトヲ得タリ其大意ハ將軍家定其任ニ堪ヘス其ノ儲嗣タルヘキ者ハ一橋慶喜ニ若ク者ナカルヘシ而シテ公武合体將軍上洛ノ典ヲ修スヘシ一朝事アルトキハ豊信国力ヲ王事ニ尽シテ若シ不臣ノ徒アラハ列藩ト幕府ノ親藩タルトヲ問ハス兵ヲ挙ケテ之ヲ伐タン此レ豊信ノ赤心ナリ云々又豊信ノ姻家タル徳大寺公純ニ謁シ此意ヲ述ヘ江戸ニ帰リテ復命ス此事ハ安政五年ノ春即前年ノ事ナリ幕府ノ達書ハ堂上方ヘ不容易事共申通候趣トアルハ此事ヲ指セルナリ

〔万延元年〕

佐々木本

是年海南政典成ル拾五卷目ヲ別ツ十三曰職守曰考課曰繼嗣曰儀制曰神社曰戸籍曰田疇曰山虞曰関市曰賦役曰營繕曰法律曰倉庫ニシテ附録三卷一ニ廟祭儀二ニ考課例三ニ界戌營規則ナリ別ニ海南律令艸稿一卷アリ本藩ノ律ハ国初以来ノ例ヲ援引シテ之ヲ定ム一事起ル毎ニ繁難言フヘカラス依テ主刑官更新ニ制定センコトヲ請フ則草稿ヲ編成シ且多年ノ経験ヲ以テ始テ完備ナランヌヲ欲スル所ロナリ

案海南政典ヲ撰フ殊更ニ漢文体ヲ用フ異ヲ好ニ非ス本邦ノ古ヘ律令格式ノ体モ是ノ如シ且当時昇平ノ久シキ士ハ祿ヲ世ニシ出テ政ニ参与スル者其父祖ノ記録ヲ知り或ハ故事ヲ諳ンスル輩能ク官ニ登ヲ得テ只俗吏ノ体面ヲ具スルニ

過ス豊信文学ノ士ヲ登用セント欲ス若此政典ヲ読得ル者ノ如キハ讀書ノ力ニ有ニ非レハ解シ得難シ是豊信ノ意アリ
テ学識アル士ヲ待ツ所ニ出ルト云

公刊本

是年制度改正局ヲ設ケ又海南政典ヲ編輯ス政典十五卷目ヲ別ツ十三職守ト曰ヒ考課ト曰ヒ継嗣ト曰ヒ神社ト曰ヒ戸籍
ト曰ヒ田疇ト曰ヒ山虞ト曰ヒ関市ト曰ヒ賦役ト曰ヒ營繕ト曰ヒ倉庫ト曰ヒ法律ト曰フ此外附録三卷アリ廟祭儀ト曰ヒ
考課例ト曰ヒ界戌營則ト曰フ別ニ海南律令草稿一卷アリ本藩ノ律ハ国初以来ノ例ヲ援引シテ之ヲ定ム之ヲ罰例ト曰フ
畜ニ考索ノ煩ナルノミナラス刑ノ寛猛時ニ從フテ同シカラス擬律ノ際不便少カラス乃チ旧例ヲ折衷シ律令ヲ編輯シ多
年ノ経験ヲ以テ始テ完備ナラシメントス故ニ題シテ草稿ト曰フ凡ソ此書ハ吉田元吉總裁シテ専ラ編纂ノ事ニ任スル者
ハ松岡七助ナリ七助侍読ヲ以テ江戸ニ役スルニ及テ細川潤次郎之ニ代ル

私の手元にある佐々木本は、本来六卷あるべきところ、第三卷のみ逸脱している。公刊本との異動は、もちろん右
にあげた箇所にとどまらない。しかし、その多くが字句の修正に重点をおくものである。右にあげた箇所の異動は、
単なる字句の修正や文章の考訂に尽きるものではない。内容に関する重大な変更を示しているのである。それは、卷
一の右の箇所のみである。

その一は、吉田東洋に対する評価である。佐々木本では「吉田元吉人トナリ硬直ニシテ史学ニ通シ殊ニ政事ノ才ニ
富ムヲ以テ豊信ノ親任スル所ト為ル」とあるのに対し、公刊本では「吉田元吉才学ヲ以テ豊信ノ信任スル所ト為ル」

とあり、吉田東洋の資質を「才学」にのみ限定している。「才学」のみで幕末の最もすぐれた、最も体系的な法典編纂（海南政典）——合理的官僚制的改革を企図した法典——の総裁ができる筈がない。佐々木本にいうように「政事ノ才ニ富ム」ところがあったからである。評価に関して作爲的貶下があることは、明白である。それは、必然的に海南政典の評価にも及んでいる。俗吏が父祖の記録と故事を暗記して官職につくといった因循な方式（それが専門的の學識を一切問題にせず、民衆の要請に積極的な答へようとする行政的関心を有せず、試験制度もなく寵臣体制が人事行政の基本となっている点において家父長的家産官僚制の頽廢形態に他ならない。）を肅正して、律令格式を理解し眞の意味の日本法の伝統を掌握し得るような、すなわち一藩の法にとどまらざる新しい国家法の原型としての法典編纂にたづさわりの得るような人材登用の手段として漢文体の法典の編纂を志向したのであって、ここに「異ヲ好ニ非ス」という理由がある。公刊本では、海南政典の卓越せる意義を完全に削除した。公刊本における吉田東洋の評価に関する作爲的貶下の存在は、動かすことができない。

その二は、豊信が幕府の閣老の内諭により隠居せしめられ謹慎を命じられた理由について、佐々木本は、將軍嗣子のことにつき三条実万と往復した——いわゆる京都手入れを行ったことだと卒直に記しているのに対し、公刊本では、將軍嗣子問題が土佐藩の公武合体政策によるものであること、土佐藩の公武合体政策の本質は、王事に尽力することであり、したがって「若シ不臣ノ徒アラハ列藩ト幕府ノ親藩タルト問ハス兵ヲ挙ケテ之ヲ伐タン此レ豊信ノ赤心ナリ」（豊信がこのような赤心の持主でなかったことは小御所會議の経過をみても明白であろう）として、長々と見苦しいといつてもよいような釈明を記している。土佐藩の勤王の強調という作爲がある。

その一とその二とは密接に関連する。佐幕派という誤謬に満ちた偏見をもつとみられていた吉田東洋の業績に対し

作為的貶下を行い、土佐藩の公武合体派的政策に関し勤王的修飾を施したのである。佐々木本に対する公刊本のかかる変更——その変更は佐々木本に朱筆で「取消シ」と加筆を行っている——は、改ざんと断すべきものである。佐々木本を原本とするという所以がある。

維新政府は、明治三年四月、維新史編纂のために、幕末の諸藩の史料の提出を求めた。「土佐藩政録」は、これに応じたもので、土佐藩の幕末維新史の基礎史料と目すべきものである。重要なことは、かかる基礎史料に既に右述したような改ざんが内在しているということである。維新史の史料考証について考えてみなければならぬ点であると思う。公刊本について、平尾道雄氏は、解説を附せられているが、その一部には、『土佐藩政録』全六巻については、第一巻の冒頭に『曩ニ宮内省ノ命アリテ、嘉永癸丑以来王事ニ執掌セシ顛末ヲ録上セシム。此顛末ヲ詳ニセントスルトキハ勢ヒ藩政ヲ詳ニセサルベカラズ。故ニ此書ニ題シテ藩政録ト曰フ』とあって、本書成立の大事を知ることができ。序跋を欠いでいるので成立の年次を知ることができないが、維新政府が歴史編纂のために嘉永以降の史料を諸藩に求めたのは明治三年（一八七〇）四月のことである。すなわち『土佐藩政録』起稿の発端はこれによるものと推定されるが、本書の内容から推して、その脱稿はこれより数年後のことと考えなければならない。本書は高知大学図書館本によったが、かつてはこのほかに幾種かの写本があった。惜しくも戦災によって失なわれたが、そのうちの一部には福岡孝弟や細川潤次郎の筆跡で数カ所に朱書を加えたものがあり、先学田岡正枝氏からは手島季隆がその草稿を執筆したものだと思われられた。山内家記録には明治十五年（一八八二）四月十三日福岡孝弟に、同五月十六日細川潤次郎に『容堂公遺事』編集を依頼したことが見られるが、この二人が『土佐藩政録』に少なくとも考訂の役割をはたしたことは確実である。」とのべられ、貴重な伝承を伝えられている。

平尾氏は、「伯爵佐々木藏書印」という印をおした元佐々木高行所蔵本の存在を知らなかったようである。この佐々木本に多くの朱筆が加えられていることは、既にのべたところである。そして、内容に即して佐々木本を「土佐藩政録」の原本と考察すべき理由を記した。

それでは、何故この「土佐藩政録」の原本が、伯爵佐々木家所蔵、すなわち佐々木高行の所蔵するところとなっていたのであろうか。佐々木高行の伝記史料「保古飛呂比」（佐々木高行日記）―東京大学出版会刊行）の万延元年十二月の項に海南政典編纂にふれて次の如くしている。

一是年、海南政典成ル。

凡テ十五卷、目ヲ分ツコト十三、曰ク職守、曰ク考課、曰ク繼嗣、曰ク寺社、曰ク戸籍、曰ク田疇、曰ク山虞、曰ク関市、曰ク賦役、曰ク營繕、曰ク倉庫、曰ク法律、此外附録三卷アリ、廟祭儀ト云ヒ、考課例トイヒ、界戍營規則ト云フ、別ニ海南律令艸稿一卷アリ、茲ニ艸稿ト云ヘルハ、多年ノ経験ニ徴シテ始メテ完備ナラシメントテ也、吉田元吉総裁トナリ、松岡七助専ラ編纂ノ事ニ任ズ、七助侍読ヲ以テ江戸ニ役スルニ及ビ、細川侍次郎之ニ代レリ、

これをみれば、公刊本とほとんど同文である。海南政典の編纂理由についてその価値を貶下し改ざんと断じてよい変更をほどこした（佐々木本には朱筆をもって原文の取消しと加筆を行っている）ものは、「土佐藩政録」の原本を何等かの理由により手元におき校勘するを得た佐々木高行その人か、あるいは佐々木高行の系列にある人ということになるであろう。このように考えることによって、「土佐藩政録」の原本が伯爵佐々木所蔵となっている理由が明白

となるのである。

山内豊信が隠居謹慎を命じられた問題について、「土佐藩政録」の原本が豊信の京都手入れに原因があることを直載に記しているのに対し、土佐藩の公武合体政策の本質が王事にあることから説きおこして長々と見苦しき釈明的改ざんを公刊本が行っていることを既に指摘したが、「保古飛呂比」安政五年一月の項に、(参考)として大協興之進順若の略歴(末尾に「右明治廿六年取調稿 松野尾記之」と「寛政画幅ニ関スル顚末書」(末尾に「明治参拾貳年貳月穀旦 大協順若識」とある)とおさめている。ほぼその趣旨を同じくしているが、後者の文中に次の如き文がある。

於是大橋渡之助ト変称シ、脱藩ノ浪士ニ擬シ、途ヲ木曾ニ取リテ上京ス、浮浪ノ諸士ハ各跡ニ横行シ、幕吏ハ非常ノ視察ヲ敵ニシテ、容易ニ通過スルヲ得ズ、漸クニシテ三条邸ニ入り、諸侍富田織部カ家ニ潜居シ、隙ヲ得テ三条公ヲ寢殿ニ拝謁シ、口頭ヲ以テ公命ヲ述フ、其概略ニ曰ク、

一 当將軍家(家定)ハ其任ニ当サル事、

一 早ク人撰以テ西丸(大樹家儲嗣ノ常居)ヲ定ムヘシ、若豊信ノ見込如何トアラハ、一橋慶喜其任ニ当ルヘシ、

一 公武合体、將軍上洛シテ後事ヲ執ル事、

一 薩長其余各藩内奏ノ主旨承リ度事、

一 栗田宮殿下御性質又御行狀拝承ノ事、

一 豊信ハ、一朝事有錦旗翻ルノ日ハ列藩親藩ヲ不問、其不臣者討之、国力ヲ尽シテ王事ニ勤メン、

是平常ノ赤心万々御疑念ナキ事、

一越前慶永ヨリモ間使ヲ呈ス、御参扱アリ度事、

右の「寛政画幅ニ関スル顛末書」も、大脇興之進順若の略歴であり、後年の回顧によるものであることは、「錦旗翻ルノ日」云々の記事により明らかであるが、この略歴が何回かの草案の結末を示すものであることは、明治三十二年以前の、明治二十六年松野尾記之とする略歴があることによってこれを把握し得る。

最も重要な点は、山内豊信が隠居謹慎を命じられた問題について、見苦しき釈明的改ざんを行った公刊本の記述の基本となったと考えられる大脇興之進順若の略歴なるものが、「保古飛呂比」に採用されているという点である。この事実もまた、公刊本における改ざんが、佐々木高行その人、あるいは佐々木高行の系列にある人によって行われたことを明証する、といってよいであろう。この改ざんが、吉田東洋の人格ならびに海南政典の価値の作爲的貶下に集中していることに注目する必要がある。

海南政典の編纂者は、吉田東洋を総裁とし、福岡孝弟、松岡時敏、大崎重樹、戸部廉平、谷丹作、大谷茂次郎、岡万助、細川潤次郎、大町利平、森田良太郎、森沢禄馬、弘田亮助をもつて構成されている。吉田東洋は暗殺されている。彼が右法典の編纂に身命を賭していたことは、編纂者一同これを熟知していたのである。福岡孝弟以下の編纂者たちが、自らも編纂にたづさわっていた法典の価値について、維新政府に迎合するために作爲的貶下を行ったと考えることができであろうか。とくに福岡孝弟の如き重厚の人物であり、国家の構想についても解放的な見解を有していたものが、かかる迎合的な加筆、改ざんを行ったとは、とうてい考えられないのである。それ故、「土佐藩政録」

の原本（佐々木本）に即する限り、福岡孝弟や細川潤次郎が「考訂の役割をはたしたことは確実である」（平尾道雄氏解説）とすることは、誤りである、と断じなければならぬ。